公園指定に伴う浅草寺に対する認識の変化

The Change in the Perception of Senso-ji Temple by the Designation of Park

川畑香奈
KAWABATA Kana

1. はじめに

（1）背景

今日、観光への取り組みは世界的に拡大の傾向を見せている。日本でも 2007 年に観光立国推進基本法が制定され、2008 年には観光庁が設置された。加えて、2012 年に策定された観光立国推進基本計画では、「エコツーリズム」、「文化観光」、「ヘルスツーリズム」など、ニューツーリズムと総称する[1]新しい観光活動を提唱し、推進している[2]。このように、従来のマスツーリズムに加えて、新し目的や形態を持つ観光活動が出現し、宗教施設においても多様な取り組みが為されている。しかし、世界遺産の暫定リストに記載された長崎の教会群のように、宗教施設に対する新しい意味付けにより、場所の商品化などといった問題の顕在化も指摘されている[3]。こうした宗教施設に対する新しい意味付けの動向は今後も増加すると考えられる。日本において、宗教施設を中心とした地域が観光地化する過程において、その本来持つ信仰の場としての性格が、これまでどのように扱われ、その過程でどのような課題が生じてきたかを明らかにする必要がある。

（2）目的

本研究では、宗教施設が信仰の場としての役割以外の役割を付加され、当該施設とその周辺が一体的に近代的な行楽地として整備された事例に対し、その整備実態や記述のされ方の変遷を明らかにすることで、宗教施設に対する認識にどのような影響が与えられたのかを考察することを目的とする。

2．研究方法と対象地

（1）研究方法

調査対象地は、東京都台東区にある金龍山浅草寺とする。その土地の魅力を紹介し、読者がそれを基に認識を構築するといった性質[4]から、調査資料には名所案内を用い、その記述から見られる視対象及び挿絵の把握を行い、その構成要素や構図に関して分析を行った。調査対象となる時期は、浅草寺が行楽地として知られ始めた江戸時代の中期後期から、公園指定が解除された直前の戦前までとする。この期間を周辺環境に変化によって 3 つの時期に区分し、その時期ごとの傾向を見た。

（2）金龍山浅草寺

金龍山浅草寺は 7 世紀に成立した都内最古の寺院で、江戸時代には行楽地として知られていた。1873 年（明治 6 年）に太政官布告により境内地とその周辺が公園として指定され、林泉地の造営や浅草 6 区の発展により、歓楽街としても栄えた。浅草公園は 1947 年に指定解除、1951 年には全旧寺院所有地の返還によって正式な解体を迎えるが、浅草寺は今日でも国内外から多くの人が訪れる観光地として知られている。このように、浅草寺は本来の信仰の場として以外の意味付けや、行楽地としての整備が行われているため、本研究の調査対象とした。

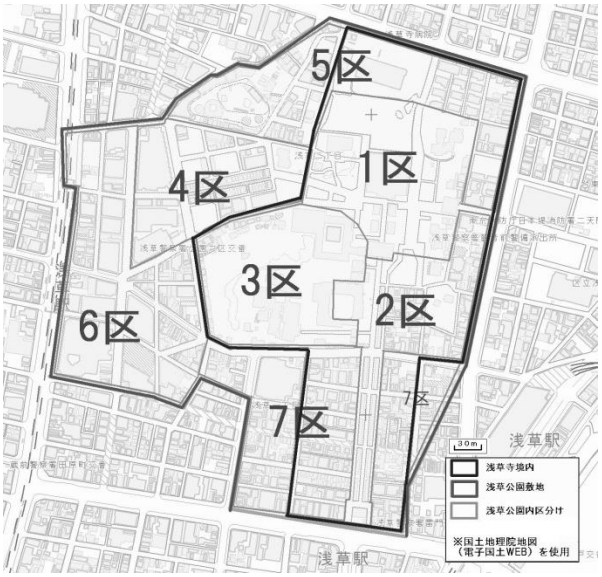

図 1 調査対象範囲（国土地理院地図電子国土 WEB を基に筆者作成）

３．公園指定後の時代背景

（１）浅草公園

浅草公園は 1871 年（明治 4 年）の社寺境内地上地処分により官有地となった浅草寺境内地及び旧寺院所有地が中心となっている。上地された土地の公園指定は、行楽地として賑わう寺院境内の経済活動を保証しながら、そこから税収を得ることも可能にした[5]。浅草寺境内及び浅草公園による収入は東京府内の公園全体の運営に役立った。1873 年の公園指定直後は、敷地内の管理権が浅草寺から東京府へ移っただけで、大きな整備は行われなかったが、公園付属地を編入するなどして数度に渡って面積の拡張が行われた。本格的な整備は 1884 年からである。公園内の出稼店に立ち退きを命じ、不要な家屋等を取り壊すといった整備が広く行われた他、公園内の全域に家屋の構造や営業の制限を定めている。また、公園内を 7 つに分ける区画分けも行われた。並行して 1882 年（明治 15 年）に始まった旧火除地における林泉地の造営も、1885 年（明治 18 年）に完了した。同年に仲見世も煉瓦造りへと改築された。これらの整備の際、特に奥山に集中していた見世物や商店など、寺院の境内に相応しくないと考えられるものに、開拓された旧火除地への移転が命じられた。これが後の「浅草 6 区」へと繋がる。第 6 区が誕生した直後は、高すぎる地代と厳しい営業制限のために閑散としていたが、1886 年（明治 19 年）に営業可能種目が大幅に増加してからは、瞬く間に歓楽街として発展し、浅草公園の名よりも「浅草 6 区」の名が先行するまでに栄えた。奥山が衰退する一方で、6 区は公園解体後の戦後まで繁栄を続けていくが、次第に衰退していった。

（２）社会背景

公園指定期から行楽地展開期にかけての浅草公園の処遇には、西洋的な公園への理想と公園制度の経済基盤としての２つの思惑が鬩ぎ合っていた。当時の日本の公園はパリやベルリンといった西欧諸国の都市公園を理想として掲げており、1884 年頃から構想されて 1903 年（明治 36 年）に開園した日比谷公園がその最たる例である。

浅草公園には公園制度における財源としての期待があった。当時の公園制度は独立採算制を取っており、各々の公園から上がった収益を府が運営するすべての公園の運営費に回していたのである。浅草公園の収入は全公園のうち約８割を占めており[6]、後の日比谷公園の建設にも使用された[7]。府が 6 区の開発を進め、営業可能種目を増やすなどの策を取ったのは、こうした背景のためであった。つまり、公園制度における位置づけをみると、公園指定期にはただ近世以来の名所地を公園にしただけであったものが、行楽地展開期からは公園制度の財源として扱われるようになったのである。

また、1877 年（明治 10 年）に上野公園にて第一回内国勧業博覧会や 1879 年（明治 12 年）にグラント将軍歓迎会が行われたことに始まり、上野公園、芝公園、日比谷公園他全国の公園が様々な記念式典や民衆運動に使用された。公園は国家あるいは民衆の意思の発露の場となった[8]。しかし、浅草公園ではそうした式典が開催されることは少なく、1918 年（大正 7 年）の米騒動に関する民衆の集結と、1920 年（大正 9 年）の社会主義同盟創立記念式のみであった。

浅草公園を利用していた庶民からみると、公園の指定前も以後も依然として行楽地として親しまれ続けた。しかし、明治 10 年代、特に明治 12 年から 14 年は奥山における見世物の最盛期であり、6 区の誕生後は行楽の中心がそちらへ移っていった。浅草公園は東京における他の公園と性質を異にしており、庶民的な行楽地として、またそのために公園制度の財源としての役割が課せられていたといえる。

４．時期区分について

調査対象期間の絵図や地形図をみると、江戸時代後期から明治初期の公園指定直後には、浅草寺の周辺環境に大きな変化は見られない。浅草寺の境内周辺には多数の寺院があり、参道（仲見世）の両脇には浅草寺の子院が並んでいる。公園内の本格的な整備や区画分けが行われた 1884 年（明治 17 年）以降の地図をみると、境内地の西側にあった火除地に林泉地が造営され、後に「浅草 6 区」と呼ばれるエリアが町として開発されていることがわかる。また、参道の両脇にあった子院は消失しているなど、この園内整備以降、浅草寺周辺の環境が大きく変化している。これらのことから、浅草寺の周辺環境が大きく変化した出来事として、1873 年の公園指定と 1884 年の園内整備によって、調査時期を 3 つの時期に区分した。まず、江戸時代中期後期から 1873 年の公園指定までを公園指定前期、公園指定から 1884 年の園内整備までを公園指定期、園内整備後を行楽地展開期とした。

集めた資料全 24 点を時期ごとに分類すると、公園

指定前期が 2 点、公園指定期が 5 点、行楽地展開期が 17 点となった（表１）。

表 1 調査資料一覧

時期	調査資料	出版年
公園指定前期 （江戸～１９７２）	江戸砂子 江戸名所図会	１７３２/享保１７ １８３６/天保７
公園指定期 （１９７３～１８８４）	東京名勝図会 改正東京案内 東京見物名所案内 三府名所独案内図会 東京名所案内　坤	１８７７/明治１０ １８８１/明治１４ １８８１/明治１４ １８８３/明治１６ １８８３/明治１６
行楽地展開期 （１８８５～１９４７）	東京漫遊独案内 東京案内 東京名所鑑 東京名所案内　上 東京案内：一名・遊歩の友 東京名所案内 新撰東京名所図会 東京明覧 東京案内 最新東京案内 東京府名勝図会 遊覧東京案内 居ながら東京見物 欺されぬ東京案内 東京名所案内 日本案内記 趣味の北部東京案内	１８８９/明治２２ １８９０/明治２３ １８９２/明治２５ １８９４/明治２７ １８９４/明治２７ １８９６/明治２９ １８９７/明治３０ １９０４/明治３７ １９０７/明治４０ １９０７/明治４０ １９１２/明治４５ １９２２/大正１１ １９２２/大正１１ １９２２/大正１１ １９２８/昭和３ １９３０/昭和５ １９４０/昭和１５

５．視対象の分析

（１）視対象の分類

視対象の分析は、名所案内の紹介文から視対象（記述されている要素）を抜き出し、寺院と公園のどちらの文脈で扱われているかによって分類した。また、その視対象の分布を地図上に印した。分類は見出しを基準に行ったが、見出しの無いものは直前の文脈より判断した。

観音堂や仁王門といった浅草寺の主要な構成物は、すべての時期で一貫して記述が見られた（表２）。時期ごとに見ていくと、公園指定前期と公園指定期の寺院の文脈で扱われた視対象に大きな変化は見られず、境内地内の宗教施設をほぼ全域に渡って記載していた。公園指定直後の公園指定期には公園（公園指定）が、浅草寺で起きた出来事として寺院の文脈で扱われていたが、公園の文脈では自然についての記述しか見られなかった。これは浅草寺の境内地内にあった木々などを指しているが、当時それらは浅草寺の管理から外れたために荒れかけていたという記録が残っており、特筆すべき自然であったわけではなく、「都市において自然に親しむ」という当時の西洋的な公園に対するイメージが、寺院としての捉え方に付加されただけであったといえる。

行楽地展開期になると、浅草寺の主要な構成物が公園の文脈でも扱われるようになり、浅草寺が公園の構成物の１つとして扱われる。それまで寺院で扱われていた視対象や、新しく視対象となった宗教施設はすべて公園の文脈でのみ扱われるようになる。この時期に新しく視対象となったものは、古い構成物が新しく別の構成物に建て替えられたものや新しく建てられたもの、以前からあったが初めて取り扱

表 2 視対象分類一覧表

分類	構成物名	公園指定前期		公園指定期		行楽地展開期	
		寺院	公園	寺院	公園	寺院	公園
境内中心部	観音堂	○	―	○	×	○	○
	仁王門	○	―	○	×	○	○
	五重塔	○	―	○	×	○	○
	随身門	○	―	○	×	○	○
	雷門	○	―	○	×	○	○
	経蔵	○	―	○	×	○	○
	鐘楼	○	―	○	×	○	○
	伝法院	×	―	×	×	○	○
	淡島堂	○	―	○	×	×	○
	銭塚弁財天	○	―	○	×	×	○
境内奥山	閻魔堂	○	―	○	×	○	○
	地蔵古碑	○	―	○	×	×	×
	念仏堂	○	―	○	×	×	○
	釈迦堂	○	―	×	×	×	○
境内	浅草神社	○	―	○	×	○	○
	銭瓶辨天	○	―	○	×	×	○
	時の鐘	○	―	×	×	○	○
	平内兵衛像	○	―	○	×	○	○
	濡仏	○	―	×	×	×	○
	六地蔵 石燈籠	○	―	○	×	○	○
消失（境内）	十社権現	○	―	○	×	(○)	―
	熊谷稲荷社	○	―	○	×	―	―
	護国殿	○	―	○	×	―	―
	護摩壇跡	○	―	○	×	―	―
	西宮稲荷社	○	―	○	×	―	―
	一権現	○	―	○	×	(○)	―
	姥の池	○	―	○	×	―	―
新設（境内）	公園（指定）	―	―	○	×	×	×
	銭塚地蔵	―	―	―	―	×	○
	神馬	―	―	―	―	×	○
	延命地蔵	―	―	―	―	×	○
	六十六仏堂	―	―	―	―	×	○
	六角堂	―	―	―	―	×	○
	大噴水	―	―	―	―	×	○
	仲見世閻魔	―	―	―	―	×	○
	江戸六番地蔵	―	―	―	―	×	○
	神楽堂	―	―	―	―	×	○
	神輿堂	―	―	―	―	×	○
	千勝大明神	―	―	―	―	×	○
	榧木八幡宮	―	―	―	―	×	○
	被官稲荷社	―	―	―	―	×	○
娯楽施設	仲見世	×	―	×	×	○	○
	その他商店	○	―	○	×	○	○
	花屋敷	―	―	×	×	×	○
	パノラマ館	―	―	―	―	×	○
	凌雲閣	―	―	―	―	×	○
	見世物	×	―	―	○	×	○
	水族館	―	―	―	―	×	○
自然	例幣使の松	○	―	○	×	×	○
	大銀杏	×	―	×	×	×	○
	自然	×	―	×	○	×	×
	林泉地	―	―	―	―	×	○
碑など	日清戦役 凱旋塔	―	―	―	―	×	○
	日露戦役 忠魂碑	―	―	―	―	×	○
	瓜生岩子像	―	―	―	―	×	○

凡例：視対象○、視対象でない×、存在しない―、存在しない視対象（○）

われるようになったものの３種類ある。特に当期で初めて取り扱われるようになったものは、それまで寺院の文脈で捉えられてこなかったことなどから、特別な役割や出来事があったわけではないため、単に公園内の構成物を網羅的に記載するために視対象とされたと考えられる。このような視対象が扱われる文脈の変遷から、公園指定期から行楽地展開期にかけての調査対象範囲に対する認識が、寺院と公園の間で逆転したことが指摘できる。

（２）視対象の分布

先述の視対象の分布を寺院もしくは公園としての文脈にわけて地図上に印し、その範囲を分析した。各時期において複数の文脈で扱われている場合には、その割合を円グラフで示した。

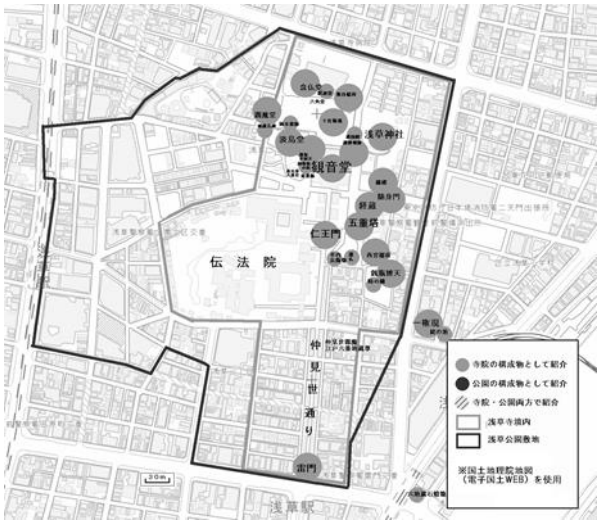

図 2 視対象分布図：公園指定前期（大きい円：3 割以上の資料に掲載）

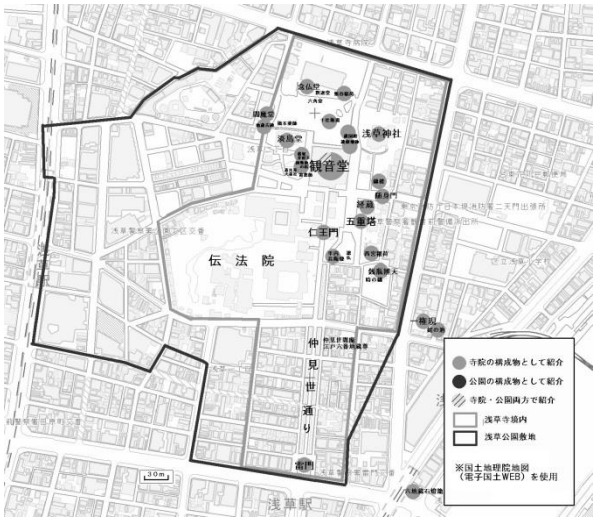

図 3 視対象分布図：公園指定期（大きい円：3 割以上の資料に掲載）

公園指定前期（図２）と公園指定期（図３）には大きな変化が見られないが、行楽地展開期（図４）には大きく変化していた。

行楽地展開期には、寺院の文脈で扱われる割合の多い範囲が観音堂前面の境内中心地に限定され、寺院として扱われる範囲が縮小していることがわかる。一方で、公園として扱われる範囲は公園内全域まで拡大しており、境内地内でも参道（仲見世）や奥山（観音堂裏側）が公園の文脈として扱われるようになった。これよって参道や奥山が寺院から切り離されたことがわかり、参道を通り山門をくぐって本堂へ参拝するという寺院の構造や、境内地内で多数の神仏が祀られているという複合宗教施設としての性格、近世以来の伝統的行楽地としての性格など、浅草寺が寺院として持っていた、要素の配置・立地や相互の位置関係から成立する空間的機能を分断・消失してしまったことが明らかとなった。

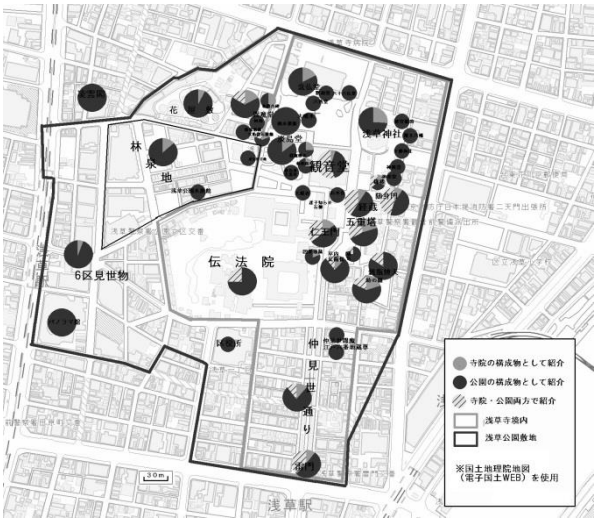

図 4 視対象分布図：行楽地展開期（大きい円：3 割以上の資料に掲載）

６．挿絵の分析

挿絵の分析では、まず対象となる文献から全 75 点の挿絵を整理し、出現頻度が 2 回以上の構成物について、出現頻度を集計した。なお、題材がその 1 点しかないものは「その他宗教施設」または「その他娯楽施設」としてまとめて記載した。また、地図や鳥瞰図は対象物の選定が行われていないため、調査から除外した。

集計の結果、観音堂・仁王門・五重塔が浅草寺および浅草公園の主要な象徴物であったことがわかった（表３）。

表 3　出現頻度集計表（資料点数/挿絵点数）

	公園指定前期（1/11）	公園指定期（5/5）	行楽地展開期（14/59）	総数（20/75）
観音堂	1/1	1/1	10/14	12/16
仁王門	0	4/4	10/16	14/20
五重塔	0	5/5	8/11	14/16
仲見世	0	5/5	6/6	11/11
林泉地	―	―	3/3	3/3
花屋敷	―	0	3/3	3/3
凌雲閣	―	―	3/3	3/3
見世物	―	―	5/5	5/5
その他宗教施設	1/9	0	2/12	3/21
その他娯楽施設	1/1	0	2/10	3/11

（i）公園指定前期

公園指定前期で調査対象となった資料は『江戸名所図会』の１点のみであったが、鳥瞰図や行事を題材とした挿絵が主だったため、挿絵の多くを調査から除外した。しかし、それらも含めて全体的に商店や芝居小屋などの見世物、それらに集まる客の様子が細かく描かれており、近世の浅草寺の行楽地としての性格がよく表れている。

（ii）公園指定期

公園指定期は５点の挿絵すべてが建物（主に仁王門）・五重塔・仲見世（参道）の３要素が写された構図となっている。後の行楽地展開期には挿絵として写真が用いられることもあるが、この時代はすべてが手描きであり、現実の空間配置に即さない構図で描くことがあった。この時期の一番古いものである『東京名勝図会』では、観音堂・五重塔・仲見世（参道）が描かれており、空間を歪めて五重塔を写していることがわかる（図５）。続く４点もこの『東京名勝図会』の構図を継承しているが、視点が仁王門の手前まで後退し、観音堂の代わりに仁王門を写した３要素となっている。現実の空間配置に合わせたため後退したと考えられるが、このことから、個々の構成物ではなく３要素を揃えた構図が、寺院の象徴物として優先されていたと指摘できる。

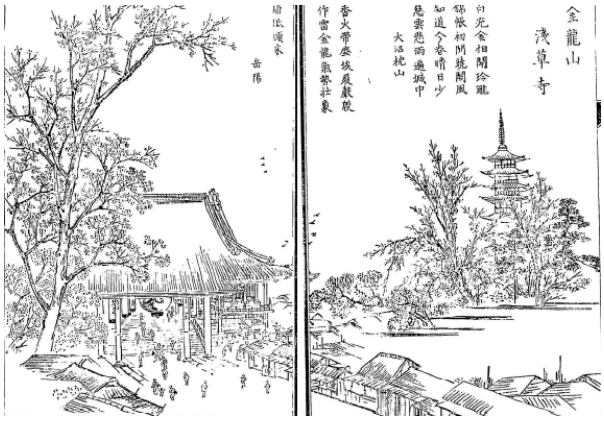

図 5 『東京名勝図会』(1877/明治 10)

行楽地展開期になるとこの構図は見られなくなり、仲見世の出現頻度の割合が減少した。これは行楽地展開期における境内地周辺の娯楽施設の発展が原因と考えられる。行楽の中心が境内から境内地の外（特に浅草６区）へと移ったため、浅草寺が持つ行楽地としての性格が薄められたことが明らかとなった。

（iii）行楽地展開期

行楽地展開期には、前の時期に見られた３要素が写された構図の代わりに、構成物を単独で大きく写す構図と、園内の区画により被写範囲を決めた構図が現れる。構成物を単独で大きく写す構図は手描きの挿絵にも、写真にも共通して見られる傾向で、特に観音堂単独と仁王門・五重塔の組み合わせが多く見られる。観音堂単独または主対象となっている挿絵はこの時期の全５９点中９点と最多であり、観音堂の重要性が高まったと共に、観音堂が周囲の宗教施設から切り離されて考えられるようになったといえる。そのため、「浅草寺＝観音堂」という単独の図式へと移行していたことが指摘できる。区画を基準とした構図とは、やや遠方から園内の区画ごとに区画全体を捉えるように写した構図のことであり、公園内の 1～7 の区画単位で被写範囲が決められている（図６）。

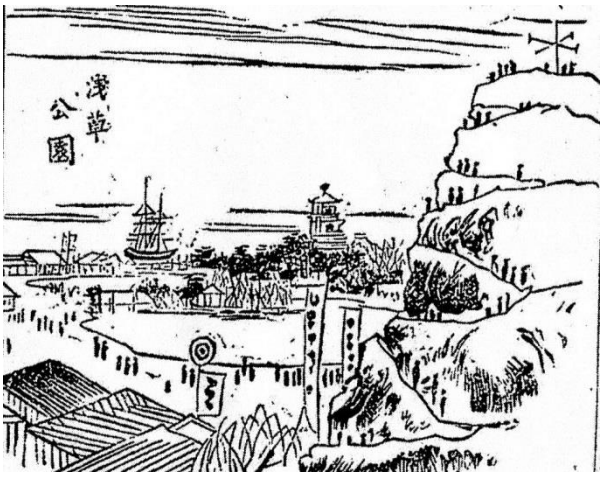

図 6『東京漫遊独案内』(1899/明治 22)

全 59 点の中で１区・２区が３点、４区が２点、６区が５点見られる。この構図は、空間が公園の整備に従って細分化して捉えられていたことを表しており、公園を各区画の集合体として認識し、より現実に即した構図で捉え直していたといえる。各区画の集合体としての公園の姿は、総合的に空間的機能を有していた寺院の姿と対照的である。

７．結論

（１）まとめ

本研究では、金龍山浅草寺を対象とし、宗教施設に本来の役割とは異なる役割が付加された際、どのような要素が認識され、また本来の信仰の場としての性格がどのように扱われてきたのか、名所案内における視対象の分析および挿絵の分析より、その変遷と影響を明らかにした。

公園指定直後には寺院としての捉え方に「都市において自然に親しむ」という公園のイメージが付加されただけであったが、1884 年に公園内の本格的な整備や区画分けが行われた後、浅草寺が公園の構成物の１つとして捉えられるようになったことが明らかとなった。このような変化は、公園指定期から行楽地展開期にかけて公園というものの存在や利用が広く定着していったという時代背景と共に、公園という制度的な意味付けではなく、物理的な環境の変化が大きく影響していたと指摘できる。また、公園として認識される範囲が拡大する一方で、寺院として認識される範囲は縮小し、限定的になった。「浅草寺＝観音堂」という認識へ移行し、空間を公園内の区画で捉え、公園全体を各区画の集合体として捉え直していたことがわかった。そのために寺院として認識される範囲が境内の中心部に限定され、浅草寺が本来有していた空間的機能が分断・消失し、行楽地としての性格も変化していったことが明らかとなった。

（２）今後に向けて

前述の通り、本研究で明らかにした浅草寺に対する認識の変化、性格的変化がおこったのは、公園内の整備が為された行楽地展開期後であった。公園というものへの理解や利用が広く一般に浸透していった時代背景と、行楽地として継続しつつ、そこに更なる整備が付加されたレクリエーション地としての性格が、浅草寺に対する認識を変更していったと考えられる。公園というものへの認識の定着は徐々に行われたと考えられるが、浅草公園における園内整備による物理的な環境の変化は急速かつ歴然と行われた。このことから、物理的な環境の変化が浅草寺に対する認識の変化に与えた影響は大きいと考えられる。浅草寺は既に公園の指定が解除されているが、変化した認識や物理的環境を指定以前の姿に戻すことは困難である。

今後も浅草寺のように、宗教施設が新しい意味を付加され、またその周辺環境が開発・整備される事例は増加し続けると考えられる。意味の付加自体は宗教施設の本質的役割を変容させることはないが、物理的環境の変化はその施設への認識に対して大きな影響を及ぼし得る。宗教施設やその周辺を開発・整備する際は、宗教施設のその土地における価値や役割などといった無形的側面に配慮した開発が必要である。また、活用の面でも、環境を変えていくのではなく、本来の機能や役割を活かした取り組みがおこなわれるべきである。こうした開発・整備時の配慮や歴史の文脈に沿った活用が、宗教施設が本来有する機能や役割を保護し継承していく上で重要であると考えられる。

注釈

注[1] 「観光立国推進基本計画」（2012 年 3 月 30 日閣議決定）

注[2] ニューツーリズム創出･流通促進事業（2007 年～2009 年度）や、ニューツーリズム普及促進モデル事業（2013 年度）など

注[3] 松井圭介：観光戦略としての宗教：長崎の教会群と場所の品化、筑波大学出版会、2013

注[4] 森田善規・羽生冬佳・十代田朗：明治以降戦前までの東京案内本の記載情報の変遷―旧東京 15 区 6 群を対象として―、観光研究 15(1)、11-18 頁、2003

注[5] 白幡洋三郎：近代都市公園史の研究――欧化の系譜――、思文閣出版、1995

注[6] 東京都公園協会編纂：東京の公園８０年、1959

注[7] 飯沼次郎・白幡洋三郎：日本文化としての公園、八坂書房、1993

注[8] 丸山宏：近代日本公園史の研究、思文閣出版、1994

参考文献

1)飯沼二郎・白幡洋三郎：日本文化としての公園、八坂書房、1993

2)白幡洋三郎：近代都市公園史の研究――欧化の系譜――、思文閣出版、1995

3)浅草寺縁起編纂会：浅草寺縁起、康文社、1928

4)田中正大：日本の公園、鹿島研究所出版社、1974

5)羽入冬佳・岡野祥一：江戸の伝統的名所の特性と明治以降戦前までの名所としての価値の変遷に関する研究、ランドスケープ研究（66）、457-460 頁、2003

6)羽入冬佳：江戸の名所の成立・成熟過程に関する研究：名所の魅力要素・空間構成の分析を通じて、都市計画　別冊　都市計画論文集、115-120 頁、2004

7)羽入冬佳：明治以降戦前までの東京の名所の成立・変遷に関する研究、ランドスケープ研究（68）、843-848 頁、2005

8)堀切直人：浅草　江戸明治編、右文書院、2005

9)松井圭介：観光戦略としての宗教：長崎の教会群と場所の商品、筑波大学出版会、2003

10)丸山宏：近代日本公園史の研究、思文閣出版、1994

11)森田善規・羽生冬佳・十代田朗：明治以降戦前までの東京案内本の記載情報の変遷―旧東京 15 区 6 群を対象として―、観光研究 15(1)、11-18 頁、2013

12)山中弘編：宗教とツーリズム　聖なるものの変容と持続、世界思想社、2012

13)渡辺信也・中川武・米山勇：都市と劇場の相関関係から捉えた『浅草六区』の隆盛と衰退：明治末から昭和初期にかけての演劇運動と建築に関する考察 4、日本建築学会関東支部研究報告集.計画系（67）、449-452 頁、1997